

# 韓日比較説話文学における 「虎」と「狼」について\*

趙恩馥\*\*・李市峻\*\*\*

(e-mail: sararandy@hotmail.com・sjlee@ssu.ac.kr)

---

## 目次

---

- 1、はじめに
  - 2、韓国における「虎狼」の表記と意味
  - 3、日本における「虎狼」の意味
  - 4、日本の「狼」と韓国の「イリ」・「ヌクテ」
  - 5、おわりに
- 

## 1、はじめに

「虎より怖い干柿」は、韓国の説話に登場する「虎」が、日本の類似説話では「狼」として登場するもっとも代表的な説話である。現在は、インドの『パンチャタトラ』を起源にして、中国、蒙古、韓国、日本といった各地での伝播や類型分布の研究報告がなされており、韓日の比較説話研究の題材として初めて注目したのは、1928年、雑誌『新民』に発表された孫晋泰の「日本に伝播した朝鮮説話―虎より怖い干柿説話―」である。1)孫晋泰の

---

\* この論文は、2012年教育科学技術部の財源として、韓国研究財団の支援を受けた研究である (NRF-2012-S1A5A2A03-2012S1A5A2A03033968)。

\*\* 主著者、明知大学、日語日文学科 非常勤講師、比較説話文学。

\*\*\* 交信著者 崇実大学、日語日本学科 教授、東アジア説話文学。

1) 孫晋泰 (1928) 「朝鮮民間説話の研究:民間説話の文化史的考察9」『新民』第37号、29～31頁。以後、『朝鮮民族説話の研究』(乙酉文化社、1947)に収録、145～149頁。また、日本語で刊行された『朝

研究が、日本の比較神話学の先駆とされる高木敏雄の『日本神話伝説の研究』に報告された「虎狼古屋漏」<sup>2)</sup>の影響によるものであることは、よく知られている。<sup>3)</sup>しかし、「虎狼古屋漏」に登場する「虎狼」について、高木敏雄は「夜叉のような鬼」と解釈し、孫晋泰は「虎」としてとらえているものの、以後、その異論の問題については、顧みることなく受け継がれる。現在、日本での「古屋の漏り」に登場する動物は、主に「虎」「狼」「虎狼」が報告されているものの<sup>4)</sup>、孫晋泰が比較対象にしていたのは「虎狼」であり、「虎」が登場する他の説話については認知していなかった。そして、孫晋泰が指摘した「虎狼＝虎」は、韓国では定説となり、日本では、「虎狼＝鬼のような怖い存在」として解釈されているものの、その意見の違いについては共有されずに現在に至っている。

孫晋泰の「虎狼＝虎」の解釈は、実は、韓国における「虎」の表記と韓国語(보름·호랑이호랑이)に関わるものであり、近年、「虎」の表記に関する語源と変遷についての研究が相次ぎ、その議論はつづいている状況である。そして、日本においても古代の文献にあらわれる「虎狼」についての研究なども確認でき、「虎狼」については、両国での研究現状を踏まえたうえでの再考が必要であると考えた。

一方、比較説話研究における「虎」と「狼」については、「虎より怖い干柿」とともにその対象となる説話が韓国の「巫子虎」と日本の「千匹狼」であり、「千匹狼」についての代表的な論考には、南方熊楠の研究を取り上げることができる。1912年、当時の朝鮮の状況を伝えた『朝鮮風俗集』の編者として知られている今村鞆は、南方の論考を読み、朝鮮の類似説話として「巫子虎」を紹介する書簡を残している。<sup>5)</sup>これには、「狼」について韓日の言葉と実在の動物の差異を言及しており、比較説話研究に対する当時の研究者の姿勢を垣間見ることができる。本稿では、韓国と日本の説話における「虎」と「狼」について、韓日の比較説話研究の黎明期といえる植民地時代の研究を再確認、その後の両国での研究成果を踏まえたうえで、今後の比較説話研究のあり方について考えてみたい。

鮮民話集』(郷土研究社、1930)の付録に「25、虎より怖い串柿」と類似説話を紹介。本稿で引用する『朝鮮民譚集』は、勉誠出版で2009年復刊したものを使用した35～37頁。

2) 高木敏雄「驢馬の耳」『読売新聞』1910年11月26日～1911年1月15日の25回による連載。以後、遺稿集として『日本神話伝説の研究』(岡書院、1925)に収録。大林太良編 増訂版『日本神話伝説の研究2』(平凡社東洋文庫、1974)、391～395頁。「天然伝説一イ・猿」『日本伝説集』(郷土研究社、1913)に、猿の尾が短くなった由来譚として同一内容を収録。『日本伝説集』ちくま学芸文庫(筑摩書房、2010)復刊、231～232頁。

3) 近年、孫晋泰『朝鮮民譚集』は、崔仁鶴によって韓国語に翻訳され『朝鮮説話集』(民族苑、2009)が刊行された。ここに収録された「3-44、虎より怖い串柿」の参考文献には、孫晋泰が引用した高木敏雄の『日本伝説集』を載せており、この説話におけるインド起源説は、高木敏雄の指摘によるものとされている。

4) 大島建彦(2004)「「古屋の漏り」の昔話」『日本の昔話と伝説』三弥井書店、59～80頁。

5) 今村鞆と南方熊楠の関係については、以下の論文に詳しい。趙恩錫(2004)「南方熊楠と朝鮮 —今村鞆との関係から—」『熊楠研究』6、南方熊楠研究会、95～108頁。

## 2、韓国における「虎狼」の表記と意味

「虎より怖い干柿」は、泣いている子供が、「虎が来る」という怖さより「干柿をやる」ということで泣き止むことから、「虎」が「干柿」を自分より怖いものと誤解して逃げるとい説話である。日本では、「世の中でもっとも怖いものはなにか」と議論する老夫婦が登場、「干柿」の代わりに、貧しさを象徴する「古屋の漏り」がもっとも怖いものとして展開する。そして、インドの『パンチャタントラ』では、「黄昏と共に食人鬼が来る」という台詞から、「黄昏」の意味を誤解する「食人鬼」が登場し、「もっとも怖いもの」を誤解する展開の類似性をもつ。この説話の源流がインドの『パンチャタントラ』であることを始めて提示したのは、日本の高木敏雄であり、日本の説話として紹介した「虎狼古屋漏」には、「虎狼」という存在が登場する。高木は、阿蘇山の麓のある寒村で発見された童話であるといい、「虎狼」については、

表題の「虎狼」は「とらおかめ」と訓み、「古屋漏」もこの地方の方言に従って、「ふるやんもり」と訓む。虎と狼との二つでなく、「とらおかめ」と名のつく一種の鬼みたよ  
うな、夜叉みたよな怪物、「古屋漏」は文字通りに、古びた家の雨に漏るのである。  
(中略) この童話の本源地はインドである。有名なる『パンチャタントラム』第五巻の第九「盗人と悪鬼とそれから猿」と題する話が、この「虎狼」のもとである。<sup>6)</sup>

と、「虎狼」が「鬼」や「夜叉」のような存在であると指摘した。日本の「古屋の漏り」には、前述したように「虎」、「狼」、「虎狼」が登場するが、その中でも「狼」が登場する説話をもっとも多いとされている。<sup>7)</sup>しかし、高木敏雄は、『パンチャタントラ』に登場する「食人鬼」との類似性を強調するために、他の「虎」や「狼」が登場する説話ではなく、「虎狼」が登場する「古屋の漏り」を対象にしたのではないかと考えられる。しかし、高木敏雄が「鬼」や「夜叉」として解釈した「虎狼」について、孫晋泰は、

この説話は、日本にもあるようで、極めて稀なものであり、神話学者故高木敏雄氏も貴重な童話として、その著「日本神話伝説の研究」四五一二頁に「虎狼古屋漏」と

6) 高木敏雄 (1925) 『日本神話伝説の研究』。大林太良編 増訂版『日本神話伝説の研究2』(平凡社東洋文庫、1974)、391~395頁。

7) 大島建彦 (2004) 上揚書、59~80頁。

題して、次のように記録している。(中略)高木氏が「虎狼」を鬼神のようで夜叉のような怪物としたのは、氏自家の見解であるか、或いはその寒村人の概念を説明したのかは知らないが、「虎」という冠詞がある以上、それは、元來、「ボム ㅁ」であったことは明白である。日本には、虎・豹類が棲息していないため、「ボム ㅁ」に関する伝説や説話は極めて少ない。(そして、朝鮮の「虎」は、常に「狼」とするのが普通である)しかしながら、その寒村が朝鮮に近い九州の寒村であり、「虎狼」として今も伝わっていることから、この説話の本源地はインドであるものの日本の説話は、朝鮮で成長したものが伝わっていることがわかる。<sup>8)</sup>

と、「虎狼」が「虎」のことであり、この説話が朝鮮から日本へ伝播したという。孫晋泰は、「この説話は、日本にもあるようで、極めて稀なもの」として、高木敏雄が紹介したと付記しているが、高木敏雄がいう「稀であること」は、「狼」ではなく、「虎狼」が登場することを意味する可能性が高い。しかし、孫晋泰は、他の地域に伝わる「虎」が登場する「古屋の漏り」については知らない状況で、「朝鮮の「とら」は、常に「狼」とするのが普通である」にもかかわらず、「虎狼＝虎」が登場することを「稀」であると解釈していることがわかる。そして、孫晋泰が「虎狼＝虎」として解釈した「朝鮮から日本への伝播説」は、以後、韓国での「虎より怖い干柿」の比較研究において定説とされてきた。以上の高木敏雄と孫晋泰による「虎狼」の解釈についての異論は、比較説話研究の「伝播論」において重要な問題であるにも関わらず、これまでの研究ではあまり注目されなかった状況については再考する必要がある。それは、韓国における「虎(ホランイ)」の語源研究として、「虎狼」という表記の問題が関わっている。そして、日本においても、現在は、高木敏雄が提示した「鬼」のような存在として踏襲されているものの、これにも異論の余地があり、日本の文献上にあらわれる「虎狼」のあり方を検討していきたい。まずは、韓国と日本の辞書における「虎狼」の内容を確認した。

8)) 孫晋泰 (1928) 上揚書 30頁. 「이 說話は 日本에도 있는 모양이나 極히 稀罕한 모양으로 神話學者故 高木敏雄氏도 貴한 童話라 하여 그 著 「日本神話傳説의 研究」 四五一二頁中에 虎狼古屋漏라 題하고 다음과 같이 紀錄하였다.(중략)高木氏가 [虎狼]을 鬼神도 갖고 夜叉와도 갖은 怪物이라고 한 것은 氏自家의 見解인지 惑은 그 寒村人의 概念을 説明한것인지는 알수 업스나 虎라는 冠詞가 있는 以上 그것은 元來는 分明히 ㅁ이라고 하였든 것이 明白하다. 日本에는 虎豹類가 棲息치 안이 함으로 ㅁ에 関한 傳説이나 說話は 極히 稀罕하다. (그리고 朝鮮의 虎의 位置에 恒常狼을 두는 것이 普通이다)그럼에도 不拘하고 그 寒村에서 朝鮮에 갖가운 九州의 寒村에서 [虎狼]이라고 지금도 傳하는 것을 보면 이 說話의 本源地는 印度이지마는 日本의 그 說話は 朝鮮에서 成長된 바를 取 하엿슴을 알수 있다

①『日本国語大辞典』<sup>9)</sup>

【虎狼】こ ろう「：ラウ」 【虎狼】〔名〕

(1) トラとオオカミ。

(2) きわめて残酷なもの、むさぼって飽くことを知らないもののとえ。

②国立国語院『標準国語大辞典』<sup>10)</sup>

・【ホラン 호랑】(虎狼)「호호：랑랑」 「名詞」

1. 虎と狼をいう。欲深く残忍な人の比喩としていう。

2. 호랑이호랑이。猫科の哺乳類の北朝鮮語。

・【호랑이 호랑이】(虎狼-)「호호：랑이랑이」 「名詞」

1.<動物>猫科の哺乳類。身長は2メートルぐらいで、背は黄褐色に黒い横模様があり、腹は、白い。尾は長く黒い縞模様がある。森林や竹林に一匹または、雄雌が共に棲食し、シベリア南部、インド、ジャバなどに分布する。「類語」大虫、**보ム 범**、**뽕표**(炳彪)。(Panthera tigris coreensis)。

2. 非常に怖い人を比喩的にいう言葉。「類意語」山中豪傑、大獣。

\* 関連規範解説：「호랑이호랑이」と「보ム범」は、同意で広く使われており、両方とも標準語にする。「호랑이호랑이」と「호랑호랑이」も広く使われるために、両方とも標準語とする。(関連条項：標準語規定3章5節26項)

日本では、「(1)トラとオオカミ」のように「虎」と「狼」の二つの存在として定義し、(2)の「きわめて残酷なもの」の比喩的表現であることは、韓国も同様である。しかし、韓国では、日本の(1)と(2)の意味以外に、「호랑이호랑이(虎)」という名詞の漢字表記として「虎狼 호랑 호랑」に、接尾詞の「-이」が付いたもので

9)『日本国語大辞典』 第二版 小学館。

10) 국립국어원国立国語院『표준국어대사전標準国語大辞典』

(<http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp> (2013,5,30検索)。原文、「호랑(虎狼)[호：-]「명사」(1) 범과 이리라는 뜻으로, 욕심이 많고 잔인한 사람을 비유적으로 이르는 말. (2) 『북한어』 『동물』 ‘호랑이’의 북한어. 「호랑-이(虎狼-) [호：--]：「명사」(1) 『동물』 고양이과의 포유류. 몸의 길이는 2미터 정도이며, 등은 누런 갈색이고 검은 가로무늬가 있으며 배는 흰색이다. 꼬리는 길고 검은 줄무늬가 있다. 삼림이나 대숲에 혼자 또는 암수 한 쌍이 같이 사는데 시베리아 남부에서 인도, 자바 등지에 분포한다. ≒대충04(大虫)·범01·뽕표(炳彪). (Panthera tigris coreensis) (2) 몹시 사납고 무서운 사람을 비유적으로 이르는 말. ‘호랑이’와 ‘범’은 모두 두루 쓰이므로 모두 표준어로 삼는다. ‘어흥이’와 ‘호랑이’가 모두 널리 쓰이므로 둘 다 표준어로 삼는다. 관련조항：표준어 규정 3장 5절 26항。韓國語の「虎」・「狼」の漢字音は、それぞれ「ホ」と「ラン」である。

あると併記していることに注目したい。現在、韓国では、「虎」は、「호랑이」<sup>11)</sup>と訳されるが、上記の『標準国語大辞典』の「関連規範解説」でみるように、「보름」という言葉も同じ意味で使われていた。「보름」は、「호랑이의訓解」<sup>12)</sup>と、「虎」を意味する固有語であるものの、現在はあまり使われていない言葉である。韓国での「虎」に関する語学研究状況をまとめると大きく、「虎」を意味する「호랑이」と「보름」の音韻の語源を追究するものと、「호랑이」の漢字表記（虎狼イ）になぜ「狼」が当てられるのかについて解明しようとするものに分けることができる。そして、「보름」に代わって「호랑이」が一般化していく状況について、「虎」の生態と社会的な状況から検討するものが相次いで発表されている。韓国語において音韻の語源研究は、15世紀にハングルが作られた以前に遡ることが難しいため「語源未詳」の場合が多く、「虎」については、蒙古語のharbirから、harは「호랑이」系統の語彙であり、birは「보름」系統の語彙である説が一般的である。<sup>12)</sup>そして、中国の文献にあらわれる「虎狼」が、「虎」の意味で使われる用例がないことを指摘、韓国の「호랑이」は、漢字の「虎狼」から転じたものではないという。<sup>13)</sup>また、韓国の文献から「虎狼」の用例を検討した洪允杓は、朝鮮時代の『楞嚴経諺解』（1461年）の用例からみると「虎狼」は、「虎」と「狼」をそれぞれ称したものであったという。しかし、19世紀頃の文献から「虎」を「호랑이」という用例が確認され、「虎狼」に名詞形接尾詞「-이」が付き、現在の「虎」を意味する「호랑이 虎狼イ」と使われるようになったとした。<sup>14)</sup>

一方、「虎」の生態と社会的変化から言葉の変遷に注目したものも確認できる。それは、植民地時代に朝鮮総督府が行った「虎狩り」に、「狼」も一緒に狩ることから両者を合わせて「호랑이 虎狼」と言ったのが「호랑이」として定着したという。<sup>15)</sup>また、陳泰夏は、「보름」は「호랑이 虎」の異称ではなく、「豹」を意味する固有語であり、

11) 国立国語院『標準国語大辞典』。「범」명사 『동물』=호랑이. 【범<훈해>】。

12) 崔文吉 (2001) 「호랑이와 乞食의 語源研究 호랑이와 거렁뱅이의 語源研究」『語源研究』4, 韓国語源学会, 31~53頁。

13) 金泰慶 (2010) 「호랑이의 語源考察 호랑이의 어원 고찰」『中国語文学論集』61、中国語文学研究会, 31~46頁。

14) 洪允杓 (2005) 「호랑이의 語源 호랑이의 어원」『새국어소식』84, 国立国語院。

\*[http://www.korean.go.kr/nkview/nknews/200507/84\\_1.html](http://www.korean.go.kr/nkview/nknews/200507/84_1.html)(검색일:2013년5월28일) 「호랑이 호 호랑이 호 <真理便読三字経 (1895년)>, 虎호랑이 호호렁니 호 <增補千字文 (19世紀末)>」

15) Park young su 박영수 (2005·6) 『遺物に登場する動物の象徴 유물 속의 동물 상징 이야기』英教出版, 50~51頁。韓國人は、虎を神聖な動物として崇拝していたため、その「보름」を狩ることへの反発を防ぐために「狼」も一緒に狩るようになったという。

本来、朝鮮半島には豹が棲食していたが、後に「虎・ホランイ」が入って来たとし、「虎狼」の表記については、上記の洪允杓の意見に従っている。<sup>16)</sup>

陳泰夏の「豹」が「ボム岬」であるという説は、現在の学界においてあまり反映されていないようであるが、しかし、1910年代に日本人によって刊行された文献には、

・ 植木末実 1913 『朝鮮の迷信と俗伝』<sup>17)</sup>

鮮人は虎も豹も同じく一所にして虎といふ。虎の皮がある代は二十五円といふ、実際みれば豹の皮なり。

・ 三輪環 1919 『伝説の朝鮮』 「虎と豹」の 頭注<sup>18)</sup>

朝鮮では豹は虎の妻なりといふ

と、実際「虎」と「豹」が区別されずに使われている用例を確認することができる。洪允杓は、「虎狼」が二つの動物ではなく、一つの動物として認識されるようになる原因として、動物に対する区別が明確ではなくなったことを指摘している。それは、現在の韓国で「이리 이리狼」と「승냥이 슌ニャンイ 豹」を区別できる人はほとんどいないはずであり、「이리 이리」という言葉は使われなくなって「늑대 닥테」が代わりに使われているが、両者の違いについてははっきり言える人もいないだろうという<sup>19)</sup>。これは、言葉の語源と変化についての研究が、文献上の表記の問題だけではなく、実際の動物の生態や社会的な状況なども合わせて考えるべきであることを示唆する。

以上、韓国における「虎」の語源研究と「虎狼」の表記についての先行研究を確認してみたが、これらの研究のほとんどが、2000年度に入ってからと比較的に新しいものであり、現在も議論が続いている。孫晋泰は、その論考の中で「虎」を「ボム岬」といい、「虎という冠詞がある以上、それは、元来、「ボム岬」であったことは明白である」<sup>20)</sup>としている。先行研究で確認したように、「ホランイ호랑이」を「虎狼イ」と表記するようになったのが、19世紀頃であるとするならば、孫晋泰は、「ホランイ・虎狼イ」の言葉を前提にして解釈していると理解できる。現在の「虎より怖い干柿」の比較研究で、「虎狼」は

16) 陳泰夏 (2009) 「虎の語源 호랑이의 어원」, 李御寧編 『十二支神 虎』 생각의나무, 28~30頁。

17) 植木末実 (1913) 『朝鮮の迷信と俗伝』 新文社, 51頁。

18) 三輪環 (1919) 『伝説の朝鮮』 博文館, 25~30頁。

19) 洪允杓 (2005) 上揚書。「狼」と「豹」については、4章「日本の「狼」と韓国の「이리」「뉘테」」で見えていくことにする。

20) 孫晋泰 (1928) 上揚書, 30頁。

「虎」として受け継がれているものの、孫晋泰が「虎」を「ホランイ・虎狼イ」と解釈したことには、「虎」に関する韓国語の過渡期的な背景があったことを指摘したい。また、「日本には、虎・豹類が棲息していないため、「ボム岬」に関する伝説や説話は極めて少ない」<sup>21)</sup>といい、韓国の説話の中に登場する動物として「豹」を「虎」と同様の位置づけをしていることも前述した「虎」と「豹」が混在していた当時の状況から考えると興味深いものである。これについては、日本での「虎狼」の解釈の問題とあわせて考察を行うことにする。

### 3、日本における「虎狼」の意味

日本の「古屋の漏り」に登場する「虎狼」は、高木敏雄が「夜叉や鬼」のようなものとして解釈したことを受け継いでおり、韓国では「虎」として解釈されていることについてはまったく共有されていない。日本での「古屋の漏り」の比較研究は、「漏」のモチーフを中心として、中国の類話との比較が主であり、朝鮮半島には「漏」のモチーフがないことから中国からの直接伝播論が定説となっている。<sup>22)</sup>しかし、韓国の研究で、「虎」のモチーフを中心にし、朝鮮半島を経由して日本に伝播したというのが定説である状況について言及している論考は、管見の限り見当たらない。<sup>23)</sup>ここでは、まず日本における「虎狼」の意味について考えてみたい。

「古屋の漏り」における「虎狼」の意味について大島建彦は、

この「虎」という獣は、もともと日本の国土に住んではいないので、むしろ空想上の動物に近かったのであるが、ただそれだけではなく、その「虎」と「狼」とが結びつけられて、「虎狼」という奇妙なものまでつくりだされていた<sup>24)</sup>

21) 孫晋泰 (1928) 前掲書、30頁。

22) 日本の「古屋の漏り」について代表的な論文には、小林恭子 (1999) 「中国民話『漏り(古屋の漏り)』をめぐって」『中国民話の会通信』52-53号 東京都立大学中国文学研究室 52号:4~19頁、53号:10~27頁、立石展大 (1999) 「日中「古屋の漏り」の比較研究」『国学院大学大学院紀要(文学研究科)』31 国学院大学大学院、269~289頁などがある。

23) 韓国における「漏」のモチーフの問題については、「虎より怖い干柿」の類話として知られている「ソナギ(夕立)に驚いた虎」にみえる「貧しさ」や「濡れる」というモチーフから日本の「古屋の漏り」との比較を別稿で試みた。本稿では「虎狼」についてのみ論じることにした。趙恩緜・李市峻 (2013) 「韓国の「ソナギに驚いた虎」と日本の「古屋の漏り」に関する比較研究」『日本研究』第56号、韓国外国語大学校日本研究所、123~143頁。

24) 大島建彦 (2004) 上掲書、68~69頁。



といい、高木敏雄と同じく「虎狼」を想像の存在として解釈している。これは、他の「古屋の漏り」に関する論考でも同じような状況で、「虎狼」を「虎」として解釈することはない。孫晋泰が「虎狼」が登場する説話のみを比較対象にしていた状況とは違い、現在は、「虎狼」以外にも「虎」と表記される「古屋の漏り」の類型が報告されている。<sup>25)</sup>そのため「虎より怖い干柿」と「古屋の漏り」の関連性を「虎狼」を「虎」と解釈することで論じる必要がないことも理由として考えられる。「古屋の漏り」に関する論文以外には、曾田文雄の上代文学における「虎狼」の記述についての論考があり、

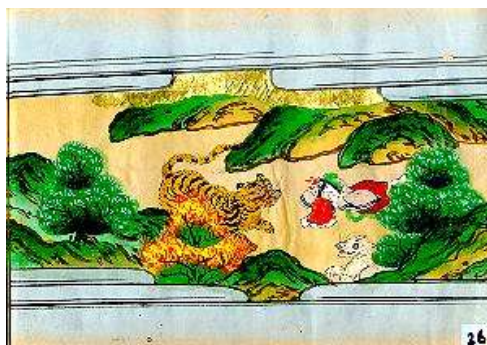
「狼」は、決して単独で現れる事が無く、常に右揚の如き、「虎」「熊」に連続した形でのみ記されてゐる。而して、此等二つの連語形式は、場面に無関係ではなく、国内と国外とで夫々に使分けられてをり、**外国**を場面にふまえた時ならば「**虎狼**」、**国内**を語る場面に登場さす際ならば「**熊狼**」、なる配慮の働いてゐた事が窺はれる。<sup>26)</sup>

と、日本では、少なくとも11世紀以前の文献において、物語の背景が外国の場合は、「虎狼」という語彙が確認できるが、ここでいう「虎狼」は、「虎」と「狼」の二つの動物であり、現在の辞書的な説明と同じく解釈できる。

一方、「虎狼」を絵画化したものとして、奈良絵本の『熊野の本地』をあげることができる。これまで、文字テキストのみで確認できる「虎狼」を可視化した資料として注目に値する。

① 『くまのゝ本地』中巻十四頁（奈良絵本・横本3冊）江戸時代初期（17C～）<sup>27)</sup>

「さるほどにとらおほかめあつまりさんじんに申やう」→ **虎と狼**



25) 大島建彦 (2004) 前掲書、59～80頁。

26) 曾田文雄 (1968) 「上代文献と「虎狼」「熊狼」」『万葉』67 万葉学会、57頁。

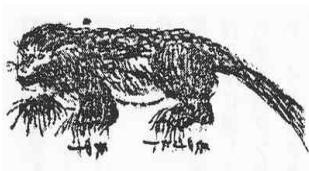
27) 『くまのゝ本地』,奈良教育大学学術情報教育研究センター教育資料館・奈良絵本画像データ, (<http://www.nara-edu.ac.jp/LIB/ehon/ehon.htm>) (2013年5月30日検索)。

- ② 『くまのほんち』上巻・第八絵二ノ一（奈良絵本『熊野の本地』卷子本2軸）江戸時代初期（17C～）<sup>28)</sup> 「**虎おふかみ**申けるは我らかまもりたてまつらんと申せしも（中略）  
とら**おふかみ**はふしとにかへりけり」 → **虎と豹**



①と②は、江戸時代初期のものだと推定されるもので、①『くまの、本地』の本文は、「とらおほかめ」とあり、絵は、「虎」と右下段の白い動物を「狼」としてみることができる。天竺を背景にしている『熊野の本地』は、上述した曾田のいう外国が背景となる場合の「虎狼」の特徴に相応するものであり、曾田の論文が11世紀以前の文献を対象にしていることに対し、それ以後の江戸時代の資料として注目できる。しかし、②の『くまのほんち』のほうは、詞書では「とらおふかみ」とあり、「とら」は「虎」であることが確かであるが、「おふかみ」は「豹」として描かれていることが確認できる。これは、韓国の文献にみる「虎」と「豹」の関連性からみても興味深い資料といえる。

一方、「虎狼」を一つの存在としてみる可能性として、江戸時代のコレラを絵画化した「虎狼狸」に注目したい。



『藤岡屋日記』の「コレラ獣」<sup>29)</sup>



錦絵新聞『かなよみ』「虎狼狸獣」<sup>30)</sup>

28) 『くまのほんち』, 駒沢大学電子貴重書庫。

(<http://www.lib.komazawa-u.ac.jp/retrieve/kityou/YA00020399/02-frame.html>) (2013年5月30日検索)。

29) Wikipedia 「虎狼狸」: 『藤岡屋日記』は、須藤（藤岡屋）由蔵が、1804年～1868年まで

コレラを動物として表現したものとしてよく知られている『藤岡屋日記』の「コレラ獣」は、虎や狼などの特徴は特にみえず、「奇妙なもの」として描かれている。1858年、コレラが流行した時、緒方洪庵によるコレラの治療手引き書として出版された『虎狼痢治準』には、

虎狼痢 邦俗之ヲ「コロリ」ト謂フ其名鄙陋ナリト雖トモ其恐ル可キコト実ニ虎狼ノ如シ故ニ今其名取テ虎狼ノ字ヲ用フ通曉シ易キニ取ルノミ<sup>31)</sup>

と、コレラを「虎狼」の文字で表記する理由を記している。そして、明治時代になるとコレラを動物化した絵が広がっていく。錦絵新聞『かなよみ』「虎狼狸獣」には、虎の模様をした狸のような獣が描かれ、以下の「虎列刺退治」をみると、



「虎列刺退治」明治19年(1886)<sup>32)</sup>

頭は「虎」、体は「狼」、尻尾は「狸」と3つの動物が合体した獣として、それぞれの動物の特徴がはっきりとあらわれている。高木敏雄が指摘した「鬼」や「夜叉」は、

---

の江戸を中心とした事件や噂などを記録した日記。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%99%8E%E7%8B%BC%E7%8B%B8>) (2013年5月30日検索)。

30) 上掲資料。明治時代の錦絵新聞『かなよみ』1877年9月21日の記事「虎狼狸獣」。

31) 緒方洪庵 訳述『虎狼痢治準』(1858跋) 2丁表。早稲田大学「古典籍総合データベース」<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php>(2013年5月30日検索)。

32) くすり博物館収蔵資料集(4) はやり病の錦絵 101頁。

<http://search.eisai.co.jp/cgi-bin/historyphot.cgi?historyid=Q00030>(2013年5月30日検索)。

『パンチャタントラ』に登場する「食人鬼」の連想からくる解釈であると考えられる。しかし、その一方では、前述した大島のいう「奇妙な存在」とは、「虎」や「狼」のような実存の動物ではなく、江戸時代以後に流行したコレラを絵画化した「虎狼狸」のような、いろんな動物が合体し、怖さを象徴する存在が背景にあったことを指摘できるのではないかと思う。

#### 4、日本の「狼」と韓国の「イリ」・「ヌクテ」

孫晋泰は、韓国の「虎」が登場する説話が日本に伝播するとき、「朝鮮の虎の位置に恒に狼がくることが普通である」<sup>33)</sup>と述べる。ここでいう「狼」は、韓国語では、「イリ・狼 이리 랑」となるが、一方では、「ヌクテ늑대」と翻訳される場合のほうが多い。このような動物に関する解釈は、前章で確認した「虎」と「豹」の問題と同じような「狼」と「豺」の表記が混用される状況が背景にある。以下は、1930年代の韓国の新聞記事にあらわれる「狼」と「豺」に関する記事である。

①東亜日報 1930年 10月15日「昨年の獣患 死傷者百余名」<sup>34)</sup>

交通が発達し、人の往来が頻繁になった今日でも、害獣の被害は相当なものであり、去年、害獣によって負傷した人が合計148人もあり(中略)その中には、虎も16頭にのぼり、もっとも多いのはイリとヌクテとして、1552頭である。数えると以下ようになる。

虎 十六 豹 二四二 熊 一三六一 狼及豺 一五,〇五二 猪 三,七九七 獐 六,五五五三 鹿 二七,〇五三

②東亜日報 1933年7月26日「生い茂る森にヌクテ、イリが横行」<sup>35)</sup>

・이리가 横行

黄海道松禾郡蓮芳面多岩里の沈相五の次女、5歳の子供を18日の午後8時30分頃ヌクテが家の中に入って、頭部を噛み付き連れ去ろうとしたのを、母親が必死に戦って子供を助けたというが(以下省略)

33) 孫晋泰 (1928) 上掲書、30頁。

34) 東亜日報 1930年 10月15日。原文は韓国語。

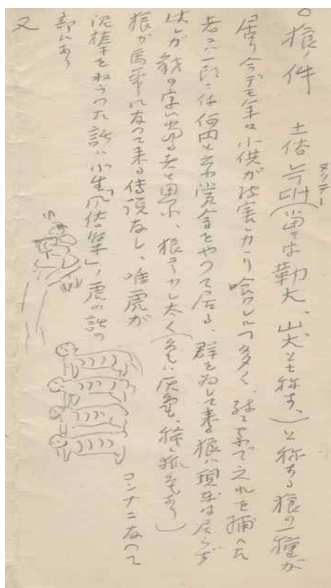
35) 東亜日報 1933年7月26日。原文は韓国語。

・北平にヌクテ：子供を食らう

海南北平面では、最近、ヌクテがあらわれ、夜になると人家において人と家畜、子供まで食らうことが頻繁であり、注意を要するという。

①は、当時の害獣による被害の統計を記しているが、ここでは、「虎十六、豹 二四二」とあり、2章でみたように言葉としては、1910年代にはすでに混用されているものの、実際の漢字表記としては区別している事例として興味深い。「이리 이리와 늑대ヌクテ」の漢字表記は「狼及豹」とあるが、合わせて表記されていることには、両者の区別が明確ではなかったことを意味していると考えられる。それは、②の記事において、題目には、「生い茂る森にヌクテ늑대、이리 이리가横行」と両者を記しているものの、本文では「이리」は登場せずに、すべて「ヌクテ」の被害に関する内容である。これらの記事から分かるのは、「이리」が「狼」であり、「ヌクテ」が「豹」と漢字表記が行われているものの、実際は「狼」と「豹」が混用されていたことの事例としてみる事ができる。このような当時の状況を、日本の「狼」との関わりから当時の朝鮮語について詳しく述べている書簡をみる事ができる。

【今村鞆・南方熊楠宛書簡】 1930年12月4日（消印）（一通三枚）<sup>36)</sup>



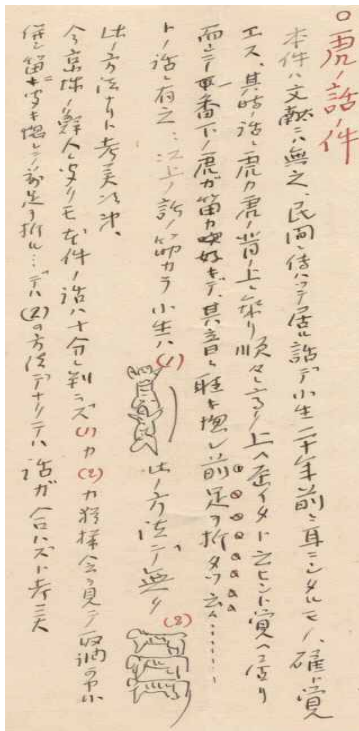
狼の件

土俗 늑대 (当て字 勒犬、山犬とも称す、) と称する狼の一種が居り今でも年々小供が被害にかり喰われる事多く、村々等で之れを捕へた者には一頭に付何円と云ふ賞金をやつて居る。群を為して来る狼は現在は居らず。此れが豹の字に当る者と思ふ。狼より少し太く（色は灰色、稀に狐色あり）狼が馬乗りになって来る伝説なし。

36) 今村鞆・南方熊楠宛書簡 1930年12月4日（消印）。和歌山県田辺市「南方熊楠顕彰館」所蔵。

この書簡は、1930年10月に南方熊楠が雑誌『民俗学』に発表した「千匹狼」に関する論考<sup>37)</sup>に対して、当時、朝鮮に赴任していた在野の民俗学者である今村鞆が送ったものである。「千匹狼」とは、狼に追われた男が木の上に登るが、狼が次々と背に乗って襲ってくるという説話である。韓国では、類話として孫晋泰が『朝鮮民譚集』に「巫女虎早당호랑이」<sup>38)</sup>と題して紹介したのが知られている。日本の「狼」は、「巫女虎」では「虎」として登場しており、「虎より怖い干柿」とともに、「虎と狼」に関する比較説話研究において主な対象となる説話である。今村は、日本の「狼」が朝鮮では「ヌクテ」であり、当て字としては「勒犬」または「山犬」とした。また、朝鮮には、日本の「狼」のようなものはなく、「豺」のような動物があり、「狼が馬乗りになって来る伝説なし」と説明している。以下は、今村が「千匹狼」の類話として紹介した朝鮮の「巫女虎」の説話である。

【南方熊楠の「千匹狼」に対して、今村鞆が紹介した朝鮮の「巫女虎」】<sup>39)</sup>



#### 虎ノ話ノ件

本件ハ文献ニハ無之。民間ニ伝ハツテ居ル話デ小生二十年前ニ耳ニシタルモノ。確ト覚エス。其時ノ話ニ虎ガ虎ノ背ノ上ニ乗り順々ニ高く上ヘ届イタト云ヒト覚ヘ居リ。而シテ一番下ノ虎ガ笛ガ好キデ其音ニ聴キ惚レ前足ヲ折タツ云々……トノ話ニ有之。以上ノ話ノ節カラ小生ハ(1)「凶」此ノ方法デ無ク(2)「凶」此ノ方法ナリト考候次第。

37) 南方熊楠 (1971) 「千匹狼」『民俗学』二卷十号 (1930年10月)、『南方熊楠全集』4、平凡社、338~362頁。

38) 孫晋泰 (1930) 『朝鮮民譚集』上掲書、296~297頁。

39) 今村鞆・南方熊楠宛書簡、上掲資料。



今村は、「巫女虎」の説話は文献にはなく、「小生二十年前ニ耳ニシタルモノ」と記している。この書簡が送られたのは1930年であり、20年前となると1910年代の「巫女虎」の説話についての資料として意味するものは大きい。孫晋泰が『朝鮮民譚集』に紹介した「巫女虎」には、「1927年7月30日、京城、鄭淳哲君譚」とあり、今村の「巫女虎」は、孫晋泰の記録よりも先行する、現在、韓国に残る「巫女虎」説話の資料としては、もっとも早い時期のものとして位置づけることができる。今村書簡にみえる「虎の図」は、虎が背に乗る場合を想定したものであり、今村は（1）のような立っている姿ではなく（2）の方法であったらうという。南方は、日本に伝わる「千匹狼」は、狼のような動物に変装した盗賊集団の話が「狼」と表象された説話であるとした。今村が、背に乗る方法に注目したのは、この南方の解釈に対する意見であるとみえる。そして、今村の書簡には、以下の写真が、同封されている。



これは、朝鮮の旅芸人の集団が、肩乗りをしている写真であるが、熊楠が指摘したような、人が背に乗って木の上にいる人を攻撃する場合の連想から同封したものであると推定できる。韓国の「巫女虎」では、危機に迫った男が最後の風流として笛を吹くと、一番下にいた虎が歌と踊りが好きで、踊り出したために「虎ヤグラ」が崩れて、男は助かったとする。今村が、図に示した「背に乗る方法」は、南方がいう盗賊集団ではなく、虎であった場合を想定してのものであろう。しかし、南方と今村の説話に対する姿勢は、説話の展開の類似性のみでなく、説話に登場する人々や動物などの生態や背景などから説話の生成につなげていくような共通性をみることができる。韓日の説話における「虎狼」や「虎」、「狼」などの問題においても、たんにテキストの題材や話の展開だけではなく、今村が説明する「狼」と「ヌクテ」の違いを論じるような方法は、今の比較説話研究状況において示唆するものがある。現在の比較説話研究では、説話の類似性や同一のモチーフなどを

比較する際、文字テキストのみを対象にしており、その背景にある言葉の変化や社会的な状況を文脈の中に取り入れて解釈するような研究は少ない状況である。「虎狼」の表記や解釈から確認したように、言葉の問題だけではなく、当時の言語の変化や説話の背景となる地域の生態が深く関わっており、それらを踏まえたうえでの説話の解釈が重要であることを指摘したい。そして、「狼」をたんに漢字表記としてみると「イリ」であるにも関わらず、実際、韓国で翻訳される場合は「ヌクテ」として通用しているような状況は、比較説話研究において、安易な比較では読み落とされるものが多いことを示している。そこで、南方熊楠と今村鞆、孫晋泰、高木敏雄のような、現在は、先行研究として言及されるのみの当時の研究は、再評価されるべきであり、今後の比較説話研究において一つの指標となるのではないかと思う。

## 5、おわりに

日本の比較説話研究の黎明期といえる1910年代は、南方熊楠や高木敏雄などによる資料調査と研究報告が相次いでいた<sup>40)</sup>。しかし、戦前の比較説話研究実績はあまり注目されず、その理由には、柳田国男の「一国民俗学」に代弁されるような状況があった。一方、韓国と日本の比較説話研究においても、孫晋泰の『朝鮮民譚集』にみるような実績は、現在の韓国文学研究史においてもっとも重要な先行研究として受け入れられているものの、当時の日本人学者達との関連や影響関係などを言及することは少ない。近年、高木敏雄や南方熊楠、そして今村鞆のような在野の研究者への再評価が試みられ、孫晋泰についても、柳田民俗学を学び、『朝鮮民譚集』の刊行など、柳田国男の助力を得ているものの、比較説話研究では、高木敏雄や南方熊楠の影響が指摘された。<sup>41)</sup>このような、近代初期の韓日における比較説話研究への再評価が進むなかで、本稿では、当時の研究が現在の研究に及ぼしている影響と問題点についての再検討を試みた。

韓日の説話研究において「虎」と「狼」に関する説話は、「虎より怖い干柿」と「古屋の漏り」が主な対象となり、高木敏雄と孫晋泰による「虎狼」の解釈には、それぞれの

40) 鈴木寛之 (2011) 「一九一〇年代の伝説研究と高木敏雄」『史境』63、歴史人類学会、64-75頁。

41) 増尾伸一郎 (2009) 編「解説—孫晋泰の比較説話研究」『朝鮮民譚集』231~232頁。



国における言語変化の問題と社会的な文脈の違いが背景にあったことを確認した。そして、「虎」と「豹」、「狼」と「豺」などが混在して用いられている資料を検討、同じ漢字文化圏として共有される認識と実際の動物の生態からくる問題点は、今後の比較説話研究において重要な論点になるだろうと考えている。また、韓国と日本での「虎より怖い干柿」と「古屋の漏り」の比較研究が、それぞれまったく違った方向をもって展開され、その研究状況すらも共有されていない現状を確認した。これについても、韓日の比較説話研究において、近代初期の資料や研究は、再検討の余地を多く残しており、以降の研究成果の共有への認識が必要であると指摘したい。そして、説話のテキストのみを対象にするだけでなく、本文で紹介した今村書簡のような当時の人的交流に関する調査なども必要であるとされており、これらの問題を念頭におきつつ、今後さらに研究を進めていきたい。

## 【参考文献】

- 国立国語院 『標準国語大辞典』 <http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp> (2013,5,30)
- 金泰慶 (2010) 「ホランイの語源考察 호랑이의 어원 고찰」 『中国語文学論集』 61、中国語文学研究会、31～46頁
- Park young su 박영수 (2005・6) 『遺物に登場する動物の象徴 유물 속의 동물 상징 이야기』 英教出版、50～51頁
- 孫晋泰 (1928) 「朝鮮民間説話の研究:民間説話の文化史的考察9」 『新民』 第37号29～31頁
- \_\_\_\_\_ (1947) 『朝鮮民族説話의研究』 乙酉文化社、145～149頁
- \_\_\_\_\_ (2009) 『朝鮮民譚集』 勉誠出版、35～37頁
- 趙恩鶴・李市峻 (2013) 「韓国の「ソナギに驚いた虎」と日本の「古屋の漏り」に関する比較研究」 『日本研究』 56号、韓国外国語大学校日本研究所、123～143頁
- 陳泰夏 (2009) 「虎の語源 호랑이의 어원」 李御寧編 『十二支神虎』 생각의나무、28～30頁
- 崔文吉 (2001) 「ホランイと乞食の語源研究 호랑이와 거렁뱅이의 語源研究」 『語源研究』 4、韓国語源学会、31～53頁

- 洪允杓 (2005) 「ホランイの語源 호랑이의 어원」 『새국어소식』 84、国立国語院。  
[http://www.korean.go.kr/nkview/nknews/200507/84\\_1.html](http://www.korean.go.kr/nkview/nknews/200507/84_1.html)(검색일:2013년5월28일)  
『日本国語大辞典』 第二版、小学館、(2000~2002)
- 大島建彦 (2004) 「「古屋の漏り」の昔話」 『日本の昔話と伝説』 三弥井書店、68~69頁
- 小林恭子 (1999) 「中国民話『漏り(古屋の漏り)』をめぐって」 『中国民話の会通信』 52-53号 東京都立大学中国文学研究室52号:4~19頁、53号:10~27頁
- 鈴木寛之 (2011) 「一九一〇年代の伝説研究と高木敏雄」 『史境』 63、歴史人類学会、64-75頁
- 曾田文雄 (1968) 「上代文献と「虎狼」「熊狼」」 『万葉』 67、万葉学会、57頁
- 高木敏雄 (1974) 大林太良編 増訂版『日本神話伝説の研究2』 平凡社東洋文庫、391~395頁  
(2010) 『日本伝説集』 筑摩書房、231~232頁
- 立石展大 (1999) 「日中「古屋の漏り」の比較研究」 『国学院大学大学院紀要(文学研究科)』 31 国学院大学大学院、269~289頁
- 趙恩馥 (2004) 「南方熊楠と朝鮮—今村鞆との関係から—」 『熊楠研究』 6、南方熊楠研究会、95~108頁
- 植木末実 (1913) 『朝鮮の迷信と俗伝』 新文社、51頁
- 増尾伸一郎 (2005) 「女の屍に乗る男『今昔物語集』の怪異譚と昔話「古屋の漏り」をめぐって」 『アジア遊学・特集—共生する神・人・仏—』 79、勉誠社、70~186頁  
(2007) 「比較神話伝説学の黎明—高木敏雄と柳田・南方・津田」 『アジア遊学—〇〇号の提案—これからの研究構想を語る』 100、勉誠出版、112~116頁
- 南方熊楠 (1971) 『南方熊楠全集』 4、平凡社、338~362頁
- 三輪環 (1919) 『伝説の朝鮮』 博文館、25~30頁
- 『くまのゝ本地』 奈良教育大学学術情報教育研究センター教育資料館・奈良絵本画像データ、(<http://www.nara-edu.ac.jp/LIB/ehon/ehon.htm>)
- 『くまののほんち』 駒沢大学電子貴重書庫  
(<http://www.welib.komazawa-u.ac.jp/retrieve/kityou/YA00020399/02-frame.htm>)
- 須藤由蔵 『藤岡屋日記』 「虎狼狸」、錦絵新聞『かなよみ』 1877年9月21日「虎狼狸獸」 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%99%8E%E7%8B%BC%E7%8B%B8>)
- 緒方洪庵 訳述『虎狼痢治準』 (1858跋) 2丁表。早稲田大学「古典籍総合データベース」 (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php>)
- くすり博物館収蔵資料集(4) はやり病の錦絵  
(<http://search.eisai.co.jp/cgi-bin/historyphot.cgi?historyid=Q00030>)

## 要 旨

韓国の説話に登場する虎が日本では狼として現れる代表的な説話である「虎より怖い干柿」の比較研究は、孫晋泰によって始まり、高木敏雄の影響を受けていることが知られている。現在の研究は、韓国では、孫晋泰による韓国から日本への伝播説が定説となっているものの、日本では「漏」のモチーフに注目、韓国からの伝播説が否定されているのが現状であった。これは、日本の「古屋の漏り」に登場する「虎狼」の解釈において、高木と孫晋泰の意見には、異論があったものの、現在の研究では、議論なく踏襲されてきた結果であることを確認した。そこで、韓国の「虎—ホランイー」の語源研究と日本の文献に登場する「虎狼」の表記について再考する必要があることを提示した。高木敏雄と孫晋泰による「虎狼」の解釈には、それぞれの国における言語変化の問題と社会的な文脈の違いが背景にあったこと確認した。そして、「虎」と「豹」、「狼」と「豺」などが混在して用いられている資料を検討、同じ漢字文化圏として共有される認識と実際の動物の生態からくる問題点について指摘した。一方、「虎」と「狼」に関する説話として、「巫女虎」と「千疋狼」があり、植民地時代に朝鮮に滞在していた今村軔の南方熊楠宛の書簡には、「巫女虎」に関する記述が確認でき、新資料として紹介した。

キーワード：「虎より怖い干柿」、「古屋の漏り」、虎、狼、虎狼

투 고 : 2013. 5. 31  
1차 심사 : 2013. 6. 15  
2차 심사 : 2013. 7. 6